

スピーチの成功・失敗経験が感情と原因帰属に及ぼす効果

小笠原 光*・下仲 順子**

Key Words: 原因帰属, スピーチ課題, ストレス

問題と目的

因果関係の認知を通して、環境内に生じる現象や人間の行動を解釈する過程を帰属過程 (attribution process) と呼んでいる (古畑, 1994)。この帰属過程において最も中心となるのは、行動や現象の原因を何に帰すかという原因の帰属であり、行為者の行動の原因を行為者自身の、性格や能力などの内部属性に関係した要因と、周囲の状況や他人の影響に帰される要因の2つに分けることができる (柳井, 2003)。帰属もこれに対応して、内的帰属と外的帰属とに分けられる。

今日、原因帰属を扱った研究では帰属の様式がその後の動機づけ、感情、行動に及ぼす影響の検討が多数行われており (伊藤, 1996; 杉浦, 1995; 鈴木・勝倉・杉江, 1993; 増田, 1994)、そのなかでは内的帰属傾向と外的帰属傾向の違いが上記の各種要因に与える影響が主な焦点になっている。そしてこれらの研究の多くは、ある事象に対する原因帰属を場面想定法により測定しているものが多い (松本, 1997; 三宅, 2000; 川島, 2005; 神田, 2007)。場面想定法とは、あるシナリオで描写された社会的場面のなかに自分がいると想定して、その場面での自分の認知、感情、行動などを推測する方法である (村田・山田, 2000)。場面想定法は、実験室で行うことが難しい内容を扱う研究において用いられることが多く、多数の場面や条件を設定することが可能であることから、多くのデータを得ることができるという長所が挙げられる。しかし、否定的評価の過大推測に自尊感情が及ぼす影響を場面想定法を用いて検討した藤島 (2004) は、場面解釈が実験参加者によって異なる可能性を示唆しており、実験室実験により、リアリティを高めた上での検討の必要性を示唆している。このことから、場面想定法の場合は被調査

* 大学院人間学研究科

** 人間学部心理学科

者によって想定の方法に個人差が出やすいと考えられるほか、期待するような状況を必ずしも適切に想定できているとは限らない。そこで、本研究では実験室場面において原因帰属の測定を行う。日常生活の中で原因帰属が強く自覚される場面としては、テストやスピーチといった状況が考えられる。なかでも、日常生活におけるスピーチ場面を考えると、入学試験や就職における面接のほか、学校や会社で行うプレゼンテーション場面などのように一般的評価を伴うことが多く、緊張や不安といった感情が喚起されると考える。さらに、そのスピーチの発表が発表者にとって重要度が高い場面であった場合（例えば、第一志望の企業の入社試験時の自己紹介スピーチ場面など）、その場面が発表者にとって強いストレス場面となり、評価の結果を反映した原因帰属が生じやすいことが期待される。

以上のことから、本研究ではスピーチ課題を用い、課題の結果に対する肯定的／否定的評価が感情と原因帰属に与える影響を検討することを目的とする。また、その際、実験場面がより現実場面に近い状況であったかを検討するために、主観的感情と生理指標の測定を行い、スピーチ課題時の主観的感情と生理指標から実験場面がストレス課題となっていたかを検討する。また、実験参加者が今回のスピーチ課題に対する肯定的／否定的評価を報告されたとき、今回行ったスピーチ課題の評価の違いが実験参加者にとってスピーチの成功・失敗として捉えられていたかどうかについても検討する。

方 法

【実験参加者】

実験参加者は健康な女子大学生 40 名（平均年齢 21.3 歳， $SD=0.7$ ）であった。

【実験器材】

電子非観血式血圧計（エー・アンド・デイ製バイタルセンサ TM・2550）により、血圧および心拍を測定した。また、スピーチの発表場面が、実験参加者にとって評価される場面として、重要度の高い課題であることを意識させるため、スピーチ時にビデオカメラ（SONY, CCD-TR12）を作動させた。その際、ビデオカメラで撮影した実験参加者のスピーチ映像は、実験参加者本人に見えるように設置したテレビ（SONY, KV-16VW2）画面に映し出した（図 1）。

【指標】

心理指標：実験参加者の感情状態を操作する実験を行ったとき、その操作の妥当性を確認するために感情喚起を測定する尺度が用いられる（有光, 2002）ことから、今回は多面的な感情状態を測定する気分プロフィール検査（Profile of Mood States ; POMS）で測定することのできる 6 感情を使用した。この 6 感情は、1. 緊張-不安（Tension-Anxiety ; T-A）、2. 抑うつ-落ち込み（Depression-Dejection ; D）、3. 怒り-敵意（Anger-Hostility ; A-H）、4. 活気（Vigor ; V）、5. 疲

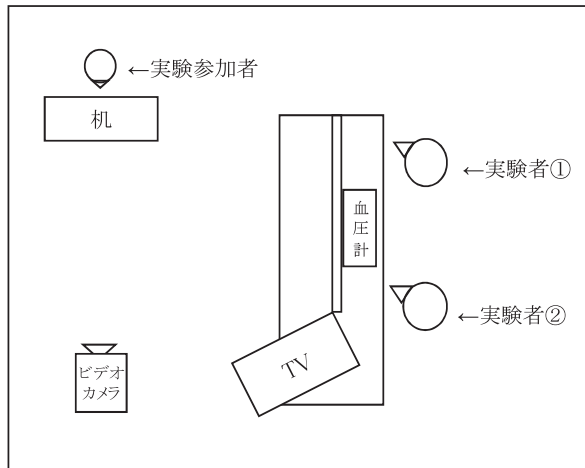


図1 実験時の実験参加者および実験者の配置

労 (Fatigue ; F), 6.混乱 (Confusion ; C) からなっており, 今回は, Visual Analog Scale (以下, V.A.S.) で回答を求めた. 櫻井・山本・清水 (2006) では, 感情や気分の研究においては, 実験者の介入や非効率的な実験は測定値に何らかの影響を及ぼす危険性を含む可能性を示唆している. また, ストレス・感情心理学の研究において, Yamamoto & Shimizu (2004) は, 感情語 (快－不快, 覚醒－眠気) を V.A.S で応用し, 数値化している. そのため, 本研究では, 実験参加者の感情が喚起されたとき, その感情を反映しやすいと考えられる V.A.S を用いて回答を求めた. なお, この回答の処理は, 数値が高いほどその感情にあてはまり, 低いほどその尺度にあてはまらないという結果になるように処理した. また, 1つの尺度における数値の最低は 0mm, 最高は 74mm であったが, 今回は V.A.S.で最高値を 100 としたときの相対値を分析に用いた. そして, 主観的感情の測定は, 安静期, 準備期, スピーチ期, 報告期で行った.

また, 実験を行う前に原因帰属の測定を行った. 原因帰属の尺度については, 今回は実験という場で実験参加者自身に起きた事象, つまりスピーチの発表に対する評価の統制の所在を検討するため, 個人的事象についての一般的な Locus of Control (統制の所在: 以下 LOC) を測定することができる, 鎌原・樋口・清水 (1982) の LOC 尺度を使用した. この LOC 尺度は, Internal 項目と External 項目が各 9 項目ずつで, 計 18 項目からなっていた. また, 評定方法について, Internal 項目は「そう思う (4 点)」から「そう思わない (1 点)」の 4 件法で行い, External 項目では逆転項目として評定を行った. なお, 得点が高いほど Internal 傾向が強くなるように設定した. さらに, 三宅 (2000) による, 対象をより具体化した原因帰属尺度を, 今回の実験内容である “スピーチの発表” 場面に適合するように書き換えた, スピーチ課題用原因帰属尺度も使用した (表 1). これは, 採用・不採用の 2 種類について各 6 項目ずつ作成したものであり, 具体的に帰属した内容については, 努力, 取り組み方, 能力, 課題, 運, 担当者からなっている (表 1). 回答は, 「今回あなたがおこなった “スピーチの発表” に対する

評価を聞き、この評価の結果に以下の6つの質問項目がどの程度、影響していると思うかを、“非常に影響している（5点）”～“全く影響していない（1点）”のうち、もっとも今の気持ちに当てはまるところに○印をつけて下さい」という教示文のもと5件法で実験参加者に評定を行ってもらった。

表1 本実験で使ったスピーチ課題用原因帰属尺度項目

採用（1～3:内的帰属項目, 4～6:外的帰属項目）	
1. 十分に努力をした	
2. スピーチを発表するに当たり、その準備への取り組み方が良かった	
3. 能力があったからだ	
4. 自分にとってはスピーチの発表という課題は簡単だった	
5. たまたま運が良かった	
6. 採用・不採用を決める担当の人が良かった	
不採用（1～3:内的帰属項目, 4～6:外的帰属項目）	
1. 努力が足りなかった	
2. スピーチを発表するに当たり、その準備への取り組み方が悪かった	
3. 能力が足りなかったからだ	
4. 自分にとってはスピーチの発表という課題は難しかった	
5. たまたま運が悪かった	
6. 採用・不採用を決める担当の人が悪かった	

※三宅(2000)が大学生用に改訂したもの

生理指標：血圧および心拍（Heart rate；HR, bpm）を測定した。血圧および心拍の計測は、安静期（①，②），準備期（③，④，⑤），スピーチ期（⑥，⑦），結果報告待ち時間（⑧，⑨），報告期（⑩）で計10回測定した（図1参照）。特に、スピーチ課題時や、スピーチに対する採否の報告を聴取したときの心臓血管反応を測定することで、不安や緊張といった感情が喚起されているかを検討した。なお、心臓血管反応としては、収縮期血圧（Systolic Blood Pressure；SBP, mmHg），拡張期血圧（Diastolic Blood Pressure；DBP, mmHg）を測定した。

【手続き】

実験は主に、安静期、スピーチの予告、準備期、スピーチ期、結果報告待ち時間、報告期、報告期後、の7つの期間により成り立っており、各期間で測定した生理指標、心理指標を図2に示した。図2で示された、血圧・心拍は①～⑭，POMSはP1～P4，原因帰属はLOC1とLOC2，スピーチ課題用原因帰属で測定を行ったことを図中で示したものであり、各期間で行った具体的な内容、教示は以下の通りである。

安静期：血圧および心拍の測定を行うため、実験参加者の利き腕でない方の上腕動脈にカフを装着した。その後、LOC尺度を使用して原因帰属の測定を行った。その後、実験開始の教示とともに3分間の安静期に入った。安静期は、実験参加者に“スピーチの発表”について予告していない状態であり、血圧および心拍の測定を行った。血圧および心拍は、教示直後（①）と2分後（②）の計2回の測定を行った。そして、安静期の終了直後にPOMSの6感情を回

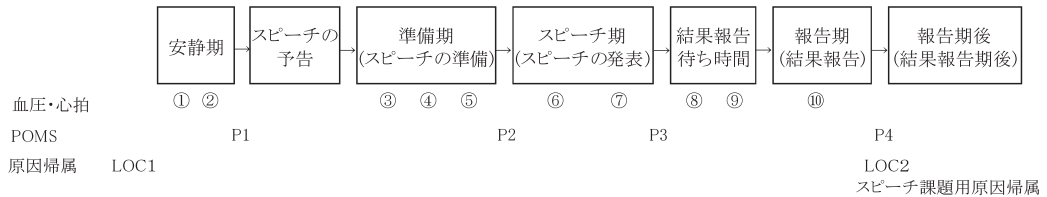


図2 実験の流れ

想法により安静期を想起しながら回答を求めた (P1)。

スピーチの予告：安静期ののち、スピーチの発表を行ってもらふ実験であることを教示で予告した。具体的には、今回の実験では、卒業論文の実験材料で使用する学校紹介スピーチ文を10分間で作成してもらふこと、スピーチの発表は1分間を目安としており、最後にはビデオカメラの前で発表してもらふことを伝えた。また、採用・不採用の評価は前回作成されたテープを基準に実験者側で決定することもあわせて伝えた。

準備期：ストップウォッチとメモ用紙を実験参加者に手渡し、「3分前になったら1度声をかけるので目安にしてください。では始めてください」という教示直後から10分間測定を行った。その間、血圧および心拍は3分(③)、6分(④)、9分(⑤)の計3回の測定を行った。そして、スピーチの準備終了直後、評価対象をスピーチの準備に改め、安静期と同様に回想法によりPOMSの6感情を評定してもらった(P2)。

スピーチ期：スピーチの準備終了後、ビデオカメラを実験参加者から180cmの距離に設置し、テレビにビデオカメラの映像が映るように準備し発表を行ってもらった。血圧および心拍は、教示中(⑥)とスピーチの発表時(⑦)に各1回ずつの計2回の測定を行ってもらった。そして、スピーチの発表終了直後、評価対象をスピーチの発表に改め、安静期と同様に回想法によりPOMSの6感情を評定してもらった(P3)。

結果報告待ち時間：「これから、スピーチの結果を判断します。5分ほどお待ちください」という教示後、実験者は成績評定(架空)をするために別室へ移動した。血圧および心拍については、2分(⑧)、4分(⑨)に各1回ずつの計2回の測定を行った。

報告期：スピーチ課題の結果は、ランダムに採用・不採用の評価を決めた。結果の報告の際の教示は、採用群の実験参加者には「全体の中であなたの成績は、平均以上でしたので卒業論文の実験材料として採用させていただきます」といった肯定的評価を、不採用群の実験参加者には「全体の中であなたの成績は平均以下でしたので卒業論文の実験材料としては不採用とさせていただきます」といった否定的評価を行い、このときの血圧および心拍を1回測定した。そして、報告直後に安静期と同様の状態で評価対象をスピーチの発表に改め、POMSの6感情の評定を行ってもらった(P4)。また、採用・不採用ごとに、それぞれスピーチ課題用原因帰属(表1参照)の測定を行った。その後、再度原因帰属を測定した。

報告期後：実験終了時に、実験参加者が十分納得するまでディブリーフィングを行ったあと、

今回のスピーチ課題に対する重要度やスピーチの出来具合，スピーチの結果を受けての感想，実験に対する全体的な感想について内省報告を求めた。

結 果

本実験の課題が十分なストレス負荷となっていたのか，またスピーチ課題に対する採否の報告の効果を検討するため，群（採用・不採用）×期間（安静期・準備期・スピーチ期・報告期）の2要因混合計画による分散分析をPOMSの6感情を用いてそれぞれ行った（図3）。

POMSの6感情に関しては，群の主効果は6感情いずれにおいても有意ではなかったが，期間の主効果については6感情すべてで有意であった（T-A： $F(3,114)=37.41, p<.001$ ；D： $F(3,144)=11.63, p<.001$ ；A-H： $F(3,144)=4.06, p<.001$ ；V： $F(3,114)=2.88, p<.05$ ；F： $F(3,114)=12.30, p<.001$ ；C： $F(3,114)=36.40, p<.001$ ）。交互作用は，活気においてのみ交互作用が認められた（ $F(3,114)=3.64, p<.05$ ）。主効果が見られた期間についてTukeyのHSD検定により多重比較を行ったところ，緊張-不安に関しては安静期と準備期（ $p<.01$ ），安静期とスピーチ期（ $p<.01$ ），準備期と報告期（ $p<.01$ ），スピーチ期と報告期（ $p<.01$ ）の間で有意差がみられた。また，怒り-敵意，疲労に関しても安静期と準備期，安静期とスピーチ期の間で有意差がみられた（怒り-敵意： $p<.05$ ，疲労： $p<.001$ ）。活気に関しては，準備期とスピーチ期の間で有意差がみられた（ $p<.05$ ）。次に，交互作用が見られた活気について単独主効果の検定を行ったところ，報告期においてのみ採否の報告の単純主効果が有意であった（ $F(1,38)=5.78, p<.05$ ）。

生理指標に関しては，SBPとDBP，HRを安静期，準備期，スピーチ期，報告期の4つの期間に分けた。なお，安静期では，1回目と2回目の測定値を使用し，準備期では3回目から5回目までを，スピーチ期では7回目，報告期では10回目の測定値を使用し，それぞれの期間の平均値を求めて，群（採用・不採用）×期間（安静期・準備期・スピーチ期・報告期）の2要因混合計画による分散分析を各生理指標について行った。その結果，群の主効果はSBP，DBP，HRいずれにおいても有意ではなかった（SBP： $F(1,38)=2.08, n.s.$ ；DBP： $F(1,38)=0.31, n.s.$ ；HR： $F(1,34)=0.34, n.s.$ ）が，期間の主効果については全ての指標において有意であり（SBP： $F(3,114)=53.04, p<.001$ ；DBP： $F(3,114)=66.41, p<.001$ ；HR： $F(3,102)=25.43, p<.001$ ），交互作用は認められなかった（図4）。そこで，各生理指標について同様に多重比較を行ったところ，SBPは安静期と準備期（ $p<.10$ ），安静期とスピーチ期（ $p<.001$ ）の間で有意差が見られ，準備期とスピーチ期（ $p<.001$ ），準備期と報告期の間で有意差がみられた（ $p<.05$ ）。また，スピーチ期と報告期（ $p<.001$ ）の間も有意差がみられた。また，同様の分析をDBP，HRで行ったところ，安静期と報告期の間を除く期間の間で有意差が認められた（それぞれ， $p<.001$ ）。

次に，スピーチの評価がLOCに及ぼす効果を検討するため，群（採用・不採用）×期間（安

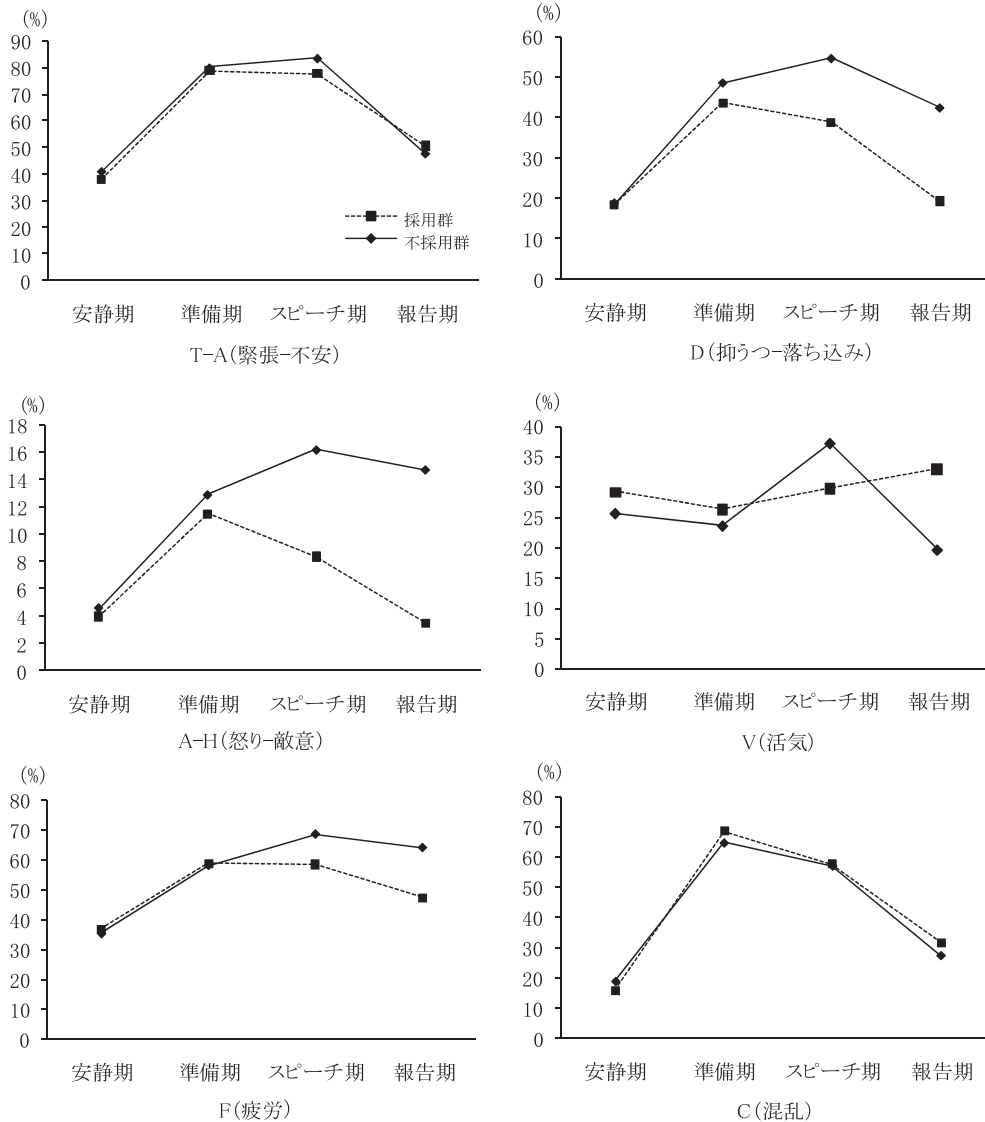


図3 報告群別の各期間における POMS の変化

静期前・報告後)の2要因混合計画による分散分析を行ったところ、群の主効果は有意ではなく ($F(1,38) = 1.22, n.s.$), 期間の変化においてのみ有意差がみられた ($F(1,38) = 4.46, p < .05$) (図5)。なお、有意な交互作用は認められなかった ($F(1,38) = 2.31, n.s.$)。

さらに、本実験で作成したスピーチ原因帰属尺度の検討を行ったところ、各6項目の原因帰属得点で有意な差が認められた (努力: $t(38) = 2.23, p < .05$; 取り組み方: $t(38) = 2.05, p < .05$; 能力: $t(38) = 5.39, p < .001$; 課題: $t(38) = 3.44, p < .01$; 運: $t(38) = -4.27, p < .001$; 担当者: $t(26.1) = -7.12, p < .001$)。なお、 F 検定の結果、 F 値に分散が見られたため、担当者については Welch の検定を行った。「努力」や「取り組み方」、「能力」、「課題」で、採用群に比べて不採

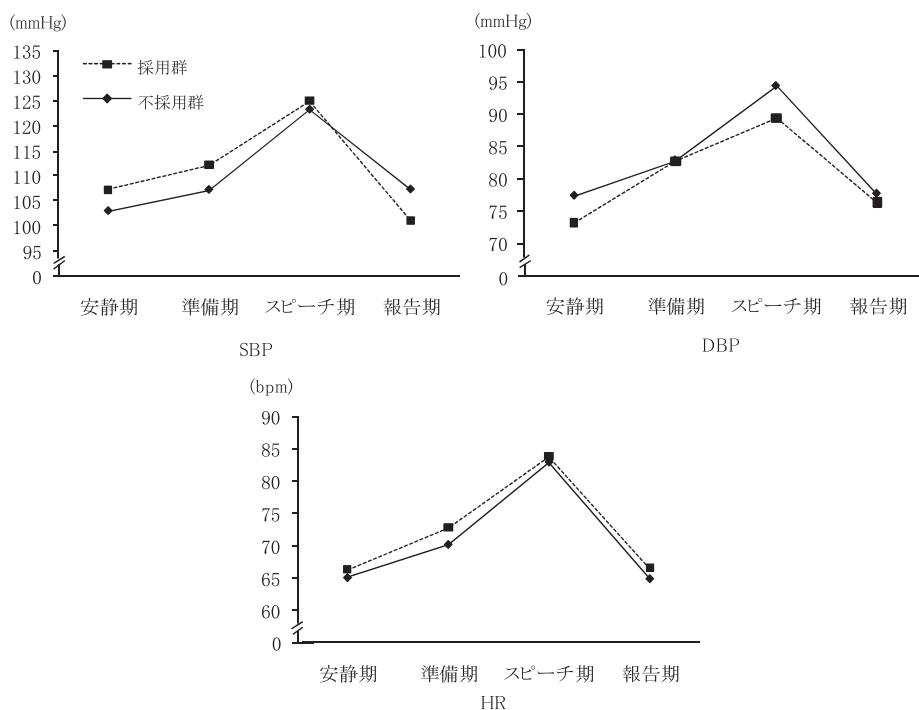


図4 報告群別の各期間における生理指標の変化

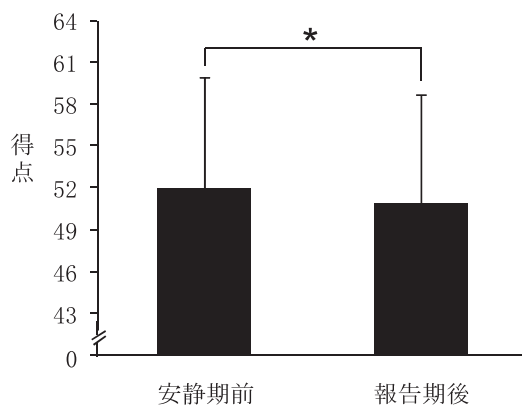


図5 スピーチ期前後の LOC 得点

用群の方が得点が高く、「運」と「担当者」では不採用群に比べて採用群のほうが得点が有意に高かった（表2）。

表2 報告群別の各スピーチ原因帰属得点

	報 告			<i>t</i> 値	
	採用 (<i>n</i> =22)	不採用 (<i>n</i> =18)			
原因帰属					
努力	2.95 (1.13)	<	3.72 (1.02)	2.23	**
取り組み方	2.95 (1.25)	<	3.72 (1.07)	2.05	*
能力	2.18 (1.10)	<	3.94 (0.94)	5.39	**
課題	2.14 (1.25)	<	3.50 (1.25)	3.44	**
運	3.09 (1.19)	>	1.67 (0.84)	-4.27	**
担当者	3.36 (1.33)	>	1.22 (0.43)	-7.12	**

※ ()内は標準偏差. ** $p<.01$, * $p<.05$.

考 察

本研究ではスピーチ課題を用い、課題の結果に対する肯定的／否定的評価が感情と原因帰属に与える影響の検討を実験室実験で行った。

まず、本研究のスピーチ場面が、より現実場面に近く、ストレス場面となっていたか、また、今回行ったスピーチ課題の評価の違いが、実験参加者にとってスピーチの成功・失敗として捉えていたかを主観的感情と生理指標を用いて検討した。その結果、主観的感情に関しては、緊張-不安、抑うつ-落ち込み、混乱といったネガティブ感情は、安静期から準備期で急激に上昇し、スピーチ期でもその高さは維持されるが、結果報告期には急激に下降していることが示された。このことから、他の期間に比べてスピーチ期が実験参加者にとってネガティブ感情を喚起させる状況であったと考えられる。さらに、生理指標に関してもすべての指標でスピーチ期に顕著な上昇が見られた。これは、精神的ストレスによって心臓血管反応が増大するという澤田（1990）の結果とも一致しており、本研究のスピーチ課題が精神的な負荷となり、実験参加者の血圧や心拍を増大させたと考えられる。このことから、本実験のスピーチ課題は十分なストレス負荷とみなすことができると考えられる。また、活気については採用群は報告後に活気が増加し、不採用群は活気が減少していることが示され、採否の報告により実験参加者が異なる感情を喚起していたことから、活気感情にのみ評価の操作が反映されていたと考えられる。以上のことから、本研究で行ったストレス場面の設定、評価の操作では、より現実場面に近い実験場面が設定できていたことが示唆される。

次に、スピーチの評価が原因帰属に及ぼす効果を検討した結果、安静期前の LOC 得点と報告後の LOC 得点が異なることが見出されたが、評価が LOC に与える有意な影響は見られなかった。これは、生理指標で採否の報告の操作による有意な影響が見られなかったこと、また、本来ならばスピーチ課題に対する肯定的評価を報告された場合、実験参加者の多くにポジティブ感情の喚起、もしくはネガティブ感情の減少といった変動が期待されるなかで、スピーチ発表時に撮られた映像を卒業論文で用いられたくないといった抵抗感や嫌悪感を抱いていた内省報告が、採用群 22 名中 10 名から得られたことから、スピーチ課題の題材に不備があった

可能性が考えられる。

また、スピーチ課題用原因帰属尺度を用いて、評価の違いが原因帰属に与える影響を検討した結果から、一部の外的帰属項目も含むが、不採用群ほど内的帰属項目の得点が高く、採用群ほど外的帰属項目の得点が高いことが示された。この傾向は、日本人は一般に失敗に対しては努力に帰属しやすく（伊藤，1996）、成功の原因を運といった外的なものに帰属し、失敗の原因を能力といった内的なものに帰属する自己批判・卑下的帰属傾向が日本人学生に見られる（北山・高木・松本，1995）という従来の結果を支持する結果であったと考えられる。また、不採用群であった実験参加者の内省から、努力や取り組み方が悪かった自分に原因があったという報告がされたのに対し、採用群であった実験参加者の内省では、今回はたまたま採用・不採用を決める実験者との相性が良く、自分以外の外的な要因が今回の結果に影響していたとの報告がされており、今回の結果を裏付ける報告が不採用群で13名、採用群で8名の実験参加者から得られていることから示唆される。三宅（2002）によれば、女性は、特にネガティブな事態を自分の能力に帰属するほどその結果を妥当であると認知する傾向を示している。本研究の結果を見ると、統計的結果は出ていないが、不採用群であった実験参加者の各スピーチ原因帰属得点において、能力がどの帰属因よりも高く、今回のスピーチ課題に対する結果を妥当であると認知していたかもしれない。今後は、スピーチ課題の内容を実験参加者が意欲的に取り組むことのできるテーマを設定し、より日常生活に近い状況で、自分にとってコントロール可能な要因に帰属する傾向の強い者と、そうでない者の認知的評価（例えば、納得、意外、妥当など）の違いについても検討していきたい。

引用文献

- 有光興記 2002 質問紙による感情研究. 感情心理学研究, 9, 23-30.
- 藤島喜嗣 2004 否定的評価の過大推測に自尊感情が及ぼす影響：場面想定法を用いた検討. 日本社会心理学会第45回大会発表論文集, 346-347.
- 古畑和孝 1980 三章 帰属過程. 古畑和孝(編) 人間関係の社会心理学. サイエンス社, pp.41-63.
- 伊藤崇達 1996 学業達成場面における自己効力感, 原因帰属, 学習方略の関係. 教育心理学研究, 44, 340-349.
- 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治 1982 Locus of Control 尺度の作成と, 信頼性, 妥当性の検討. 教育心理学研究, 35, 177-183.
- 神田信彦 2007 原因帰属と気分・感情の関係の検討. 『人間学研究』文教大学人間学部, 29, 61-67.
- 川島亜紀子 2005 家族成員による夫婦間葛藤の認知と子どもの家族機能評価との関連：中学生とその家族を対象に. 発達心理学研究, 16, 225-236.
- 北山忍・高木浩人・松本寿弥 1995 成功と失敗の起因：日本的自己の文化心理学. 心理学評論, 38, 247-280.
- 増田真也 1994 原因帰属とセルフエスティームに関する研究. 社会心理学研究, 10, 56-63.
- 三宅幹子 2000 特性的自己効力感とネガティブな出来事に対する原因帰属および対処行動. 性格心理学研究, 9, 1-10.

- 三宅幹子 2002 ネガティブな事態に対する原因帰属と感情反応, 認知的評価 —大学生において—. 性格心理学研究発表論文集, 140.
- 奈須正裕・堀野緑 1991 原因帰属と達成関連感情. 教育心理学研究, 39, 341-347.
- 櫻井優太・山本正平・清水遵 2006 コンピュータ VAS の作成およびその妥当性の検討. 愛知淑徳大学論集 —コミュニケーション学部篇—, 6, 103-113.
- 佐久間勲・村田光二 2000 6章 質問紙実験のテクニック. 村田光二・山田一成(編) 社会心理学研究の技法 福村出版, pp.107-111.
- 澤田幸展 1990 血圧反応性—仮説群の構築とその評価—. 心理学評論, 33, 209-238.
- 杉浦健 1995 失敗の努力帰属は動機付けを高めるか—算数と社会における原因帰属の比較から—. 日本教育心理学会総会発表論文集, 175.
- 鈴木秀行・勝倉孝治・杉江征 1995 中学生の原因帰属様式と不適応感との関連について. 日本教育心理学会総会発表論文集, 137.
- Yamamoto, M. Naga, S. & Shimizu, J. 2007 Positively musical effect on two types of negative stressful conditions. *Psychology of Music*, 35, 249-275.
- 柳井修 2003 4章 人間関係の認知. 岩田紀(編) 人間の社会行動 ナカニシヤ出版, pp.57-70.

(2008.12.10 受理)